

## 論考

### アーカイブズ散策(2)

#### 関東大震災直後の記事から ―第二十三巻第十二号(一九三三年十二月)より―

浜口順子

八十八年前の一九二三(大正十二)年九月一日、関東大震災が関東と東海圏を襲った。建物の倒壊と火災による被害が甚大で多くの死傷者を出したこの大地震により、当時『幼児の教育』の編集室があった東京女子高等師範学校附属幼稚園は全焼、印刷所も焼失したことから、原稿も原稿もなくなり「やむなく休刊」した本誌は、この年、第八号の後、第九と十一号がなく、今回取り上げる第十二号が十二月二十五日に発行されている。当時編集主幹であった倉橋惣三は「お茶の水の幼稚園の焼け跡に立ちて」という文章を載せた。「くづれた煉瓦と、うづ高い灰と、焦げた木材の破片との中に、土台の据石だけが整然と残って居る。それが各室の位置と区画とを、さながらに示して居るのも却って侘しい。」――

倉橋は同じ号の「大災と幼児教育」で、(東京市だけでも)官立一、公立十、私立三十三の多数の幼稚園が焼失し、また託児所も十四が焼失し、わずか三、四しか残らなかった、と報告している。このころはまだ幼稚園令(大正十五年)発布以前、つまりわが国で幼稚園はまだ独自の教育機関として認められていなかった。しかし、かねてから潜在的に高まっていた、幼児の保護・教育への社会的意識が大震災を受けて明らかに became したようである。先の

文章で倉橋は、「但し、災後、不幸なる罹災幼児のために、市内到る所に開設せられた保護事業は、其数に於ても、当事者諸君の熱心に於ても、実に特筆に値すべきものでありまして、急に応じ、機に臨む緊要の施設として、幼児保育の問題も亦決して忘れられて居なかつたのであります。市内の所謂大バラック地には、東西本願寺、救世軍、同愛会、一燈園等によつて、直に託児所の施設が始められ、其他にも亦、種々の方面の計画が、日と共に起されて居ります。」と述べている。

実際にそのバラックに急設された託児所の様子がうかがわれるレポートを紹介したい。

### 本願寺託児所について（一九二二（大正十二）年 第二十三卷第十二号） 記者

未曾有の大震災はあらゆるものを破壊した。少くとも凡ての文化の進歩を妨げたに相違ないが幼児に関する事業は最も大なる打撃を受けたに相違ない。九月一日の夕、四方火にかこまれながら幼児教育の前途を憂いたのは独り幼児教育者ばかりではなかつた。處か事實に反して幼児に関する社会的事業の聲は高くなり幼児のために活動さるる方が非常に多かつた。之は慥に幼児教育が盛んになり各方面の人々の脳裡に明らかに刻み込まれて居る事（を）証拠だてるものである。本願寺で経営さるる託児所も其一つである。

本願寺では上野、池の端、浅草、月島、深川等に託児所を設け尚増所の計画である。一日上野託児所を參觀し池田主任より伺つた處によると、ここは九月十六日に始めたもので十一月十五日迄に入所したる幼児は四二四名、既に退所したるもの三一一名、在籍は一一四名である。かく入退のはげしいのは、其家族の居住が変更する為である。開所の頃はまだバラッ

クも建たず、焼トタンを集めて建てられた仮小屋に住まって居た人が多かったが、元の住宅跡にバラックが出来たり、市のバラックに移ったりする人が多くなった為十月の初め頃はしきりに移転する人が多く退所が多かった。同時に上野に建てられたバラックに移り住む人が多くなったので入所も多かったわけである。今でも日に三、四名の申込みが絶えない。入所許可の方針はいちいち一々実地調査をして、両親ともに労働せねばならぬ人、家に子供を見とくれる人の一人もない人、両親病氣のため生計に困る人等を入所させ真にま其必要と認めない人は断って居る。

職員は主任一人保母四人、外に炊事係と給仕が一人である。朝は七時より夕方四時迄預かり昼食とおやつを与える定めであるが中には六時頃より出掛ける人もあるので六時にはもう預けにくる人がある。夕刻も六時を了ってもまだ迎えに来ない人もある。それ等の子供を飽きさせず寂しからせぬように遊ばせ夕食までさせる事は稀らしくない。中には宿泊させる事もある。或ある子供は母親の手一つに育てられて居たが、四畳半のバラックに三家族も住んで居るので、同居家族との関係であつたのか二十日以上も迎えに来ず自分の居所も知らせないのであつた。又父親まただけの子供も歩いて行かれた。後から其父は伝染病にかつたため入院した事がわかつた。これ等の子供は皆地震のためにおびえて居るので、夜泣きはする、物にはおびえる、ずいぶん手がかかるが日の重なるにつれて温かき保母の手に抱かれ慈悲深き主任の愛になつき父恋しとも母恋しともいわない。安心して居るのである。けれども我子の愛にひかれぬ人はない。二十三日目に迎えに来た父親は涙ながらに礼をのべて連れかへつた。かかる例は少なくないとの事である。食事は別に炊事場があつて子供に適したものが調理され

る。ハヤシライスや五目飯、野菜の煮付などに子供等は舌鼓をうって先生今日はおいしうございまして喜んで居る。小さい子供には先生が一口ずつやしなうて食べさせなければならぬので手がかるのである。おやつは先生方の考えて牛乳にビスケット、子供パン等其日によってきめられる。ここでは普通子供に見るように好き嫌いをいう人なく一度も食べないという子供を見た事がないのは喜ばしい事である。二間巾に四間の部屋が二つと外に狭い玄関と事務室だけの託児所は幼児の数から見て広くはない。二間巾であり窓が少なく庭もないのであるから遊戯なども思うように出来ない。時間が長いのであるから単調を補うため又日光に浴するため晴天の日は代わるがわる汽車を見たり竹の台辺の広場で運動したりして居る。組は年齢によって二つに分けてある。時間を定めてお話や手技手工などもさせ躰方にも注意して居るが一般に子供の心が荒んで居るので落ちつかない。突飛な質問に先生を困らす事も度々である。わけても上野の子供が荒んで居るといふのは周囲に於ける種々の事情による事であろう。けれども之等の子供は熱心なる保姆の感化によって日に日に善きに進んで行くのは喜ばしい事である。社会のために一身を顧みないといへ六時前よりつめかける子供を預かり食事やおやつの世話は勿論顔を洗う事から結髪爪とり、下の仕末に至るまで一日のひまもなく手も口も身体中を働かしていやな顔一つせず働き通す事は全く犠牲的精神の燃えて居る人でなければ出来ない。しかも定休日是一日と十五日だけである。尚この間に家庭を訪問して実地調査をされるときいては敬服の外はないのである。(後略)

(お茶の水女子大学大学院)